

認知症高齢者における感情表出に関する研究

- バリデーションを活用して -

都村尚子*、斉藤千鶴**、成清敦子*、家高将明*、米澤美保子*、三田村知子***

*関西福祉科学大学社会福祉学部／**関西福祉科学大学保健医療学部／***関西女子短期大医療秘書学科

【目的】

バリデーションは、認知症高齢者の感情に焦点を当てたコミュニケーション技法である。この技法における有用性に関する実践的研究は欧米においてナオミ・フェイルを中心にいくつかの検証がなされているが、わが国では十分な実証研究の蓄積がなされていない。そこで本研究は、認知症高齢者を対象に効果測定を実施し、その結果からバリデーションの有用性を示すことを目的とする。

【方法】

本研究は、特別養護老人ホーム等の高齢者施設で暮らす認知症高齢者 30 名（男性：3 名、女性：27 名、年齢：87.2±5.8 歳）を対象とし、彼らをバリデーション介入群 13 名、リアリティ・オリエンテーション（以下 RO）介入群 8 名、介入なし群 9 名に分けた上で、介入前後における認知症高齢者の感情状態を PRS（Philadelphia Geriatric Center Affect Rating Scale）を用いて測定した。分析は、Wilcoxon 符号付順位検定を行った。調査期間は、平成 24 年 10 月～平成 25 年 1 月である。バリデーション及び RO の実施方法は週に一度、それぞれの対象者にグループ形式で実施した。

なお、本研究は関西福祉科学大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：12-42）。

【結果】

介入前後における PRS 得点をみると、バリデーション介入群は陰性反応が有意に低下した（ $P<.05$ ）。また陽性反応については、有意に向上した（ $P<.05$ ）。一方、RO 介入群及び介入なし群については、陰性反応及び陽性反応ともに、有意な差は認められなかった。

【考察】

バリデーション介入群にのみ特に陽性反応がみられたのは、この技法によりコミュニケーションが成立し、心的交流が可能になったためと考えられる。その主な要因は、認知症高齢者を徹底して受容しつつ、感情レベルに焦点をあてるバリデーションの実践によるものだと考えられ、この技法は認知症高齢者の支援に有用であると考えられる。

認知症高齢者における 感情表出に関する研究 ーバリデーションを活用してー

都村尚子* 齊藤千鶴** 成清敦子*
家高将明* 米澤美保子* 三田村知子***

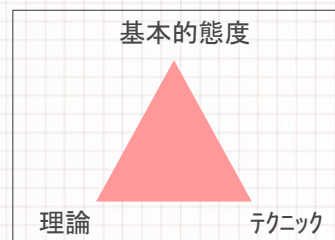
*関西福祉科学大学社会福祉学部

**関西福祉科学大学保健医療学部

***関西女子短期大学医療秘書学科

バリデーションとは

- 認知症高齢者の
感情に焦点を当てた
コミュニケーション法



■ バリデーションのゴール

- ・認知症高齢者の感情・欲求の表出を促す。
- ・人生の未解決問題解決への手助けをする。

研究背景

この技法の有用性に関する実践的研究

欧米でいくつかの検証がなされているが、わが国では十分な実証研究の蓄積がなされていない

認知症高齢者を対象に実践・効果測定を実施し、**バリデーションの有用性**を示すことをめざす

認知症の症状の各ステージ

ステージ	症状	バリデーションにおけるステージ	特徴(特に見当識、感情、コミュニケーションについて)
軽度	自立、またはほぼ自立しているが時には人の手をかりることがある	1. 認知の混乱	・時間や場所の概念はほぼ保たれている ・拒否的感情、抑うつ気分 ・複雑な言語的コミュニケーションが難しくなる
		2. 日時・季節の混乱	・時間や場所の感覚が奪われる ・言語的コミュニケーションが難しくなり、非言語的コミュニケーションに反応しやすくなる
中等度	多くの時間で介護が必要である	3. 繰り返し動作	・本人独自の時間感覚になり、外界からの刺激を受けつけなくなる ・非言語的コミュニケーションしかとれなくなり、言葉の代わりに繰り返しの動作で表現する
重度	全ての時間で介護が必要である	4. 植物状態	・動きがほとんどなくなり、寝たきり状態となる ・コミュニケーションがほとんどとれない ・心を閉ざし、ひきこもっている

研究目的

バリデーシンの有効性に関する実証研究の一つとして

本研究は、「バリデーシンは、認知症高齢者の感情表出を促す」ということを明らかにすることを目的とする

研究方法

■ 調査期間 平成24年10月～平成25年1月

■ 調査対象

特別養護老人ホーム等の施設入所者30名

性別: 男性: 3名、女性: 27名

年齢: 87.2 ± 5.8 歳

CDR: 2～3

■ 調査方法

バリデーシ介入群13名、リアリティ・オリエンテーション(以下RO)介入群8名、介入なし群9名に分け、バリデーシ及びROを週に一度、それぞれの対象者にグループ形式で実施した

グループ・バリテーションの概要

<実践方法>

- ・週に1回、同じ時間、同じメンバー、同じ場所で行う。
1回につき30分前後、3ヶ月間継続して行う。
- ・認知症高齢者(4名前後)、バリテーション・ワーカー(1名)、サブリーダー(1~2名)

<プログラム>

オープニング → 開会の歌 → ミーティング
→ アクティビティ → お茶の時間
→ 閉会の歌 → クロージング

実践の一場面



測定方法

介入前後における認知症高齢者の感情状態を PRS (Philadelphia Geriatric Center Affect Rating Scale) を用いて測定

倫理的配慮

調査に際し、研究目的、方法、個人情報等の管理方法等を説明し、施設・家族・本人の同意を得た。なお、関西福祉科学大学倫理審査委員会の承認を得て実施。

分析方法

Wilcoxon符号付順位検定を行った

結果

PRS(Philadelphia Geriatric Center Affect Rating Scale)陽性反応得点の差

	パリアーデーション 介入群	リアリティ・オリエンテーション 介入群	介入なし群
介入前	11.00(3.63)	12.88(3.94)	11.44(2.96)
介入後	13.92(2.69)	11.50(3.02)	11.56(2.55)

()は標準偏差

Wilcoxon符号付順位検定 ** : P<.01 * : P<.05

PRS(Philadelphia Geriatric Center Affect Rating Scale)陰性反応得点の差

	パリアーデーション 介入群	リアリティ・オリエンテーション 介入群	介入なし群
介入前	8.08(2.72)	8.00(2.07)	10.00(3.43)
介入後	5.31(1.70)	6.38(0.52)	9.11(4.17)

()は標準偏差

Wilcoxon符号付順位検定 ** : P<.01 * : P<.05

介入前後におけるPRS得点

バリデーション介入群

陰性反応が有意に低下 ($P < .05$)

陽性反応は、有意に向上 ($P < .05$)

RO介入群・介入なし群

陰性反応及び陽性反応ともに

有意な差は認められなかった

考察

- バリデーション介入群にのみ反応がみられたのは、この技法によりコミュニケーションが成立し、心的交流が可能になったためと考えられる。
- 本研究を通してバリデーションの有用性がある程度明らかになったのではないかと考える。

今後の課題

- 調査を継続し、さらに客観性を高めること

今回の課題を踏まえ、実証性を追求すべく、現在、科学研究費助成事業の基盤研究にて、バリデーション実施人数の増加、また対象を認知症高齢者だけでなく介護者（施設職員、地域住民）に拡大し、兵庫県但馬地区（3市2町）・香川・富山にて、三ヶ年計画で実施している（2013～2015年度）。

※本研究は関西福祉科学大学2012年度
共同研究の助成により実施された

ご静聴ありがとうございました

